

第2章

大学で何を学ぶのか：大学における学びの作法（森久聡）

はじめに

大学の教員を英語で professor と呼ぶが、もともとの意味は「前で (pro) 話す (fes) 人 (or)」という意味である。中世ヨーロッパでは、何か特定のテーマ（法律や宗教など）について学びたい人が集まり、それに詳しい人物を教師として招待した。これが大学のルーツだといわれている。だから大学の教員は professor なのである。したがって大学とは、「何かを学びたいという意欲を持つ人が自主的に集まってできた組織」ということが根底にあるのだ。

現代では、何となく進学した人もいれば、大学で学ぶことに強い意欲を抱いて大学に入学した人もいるであろう。シラバスや時間割を見て、高校までの授業科目名とは全然違う名前の講義のタイトルに期待を持っている人もいるであろう。しかし、実際に講義を受けてみたら高校や予備校のようにはっきりと正しい答えを出してもらえず、何をどうすべきかも教えてくれなくて、もやもやした気持ちになることが多い。そのため、入学時に高いモチベーションを持っていた人でも、次第に「大学の授業ってこんなものなのか」という気持ちになってしまう人は意外と多い。

そうやって大学生生活の多くをアルバイトとサークル活動や友人と遊ぶことばかりに時間に費やすようになってしまうのはもったいないと思う。日本社会では、大学を卒業した後に別の分野の大学に進学したり、社会人を経てから大学で学び直す人はほとんどいない（欧米ではそれは良くあることなので、様々な年齢層の学生が学んでいる）。学び直しができない社会の在り方に問題があることは確かであるが、日本では、ほとんどの人にとって大学の学びは人生に一度しかない経験ということになる。したがって、もし大学でしか学べないことを学ばずに卒業したら、それを学ぶ機会が失われてしまうことになる。では、この大学という学びの場を有意義なものにするためにはどうしたらよいのだろうか。そのための第一歩が、高校までの学びと大学での学びは大きく質が異なっていることに気が付くことである。

1 大学で何を学ぶのか

高校までの学びと大学での学びを区別するために、このテキストでは、高校までの学びを「勉強」と名付け、大学での学びを「研究」と名付けておきたい。高校の勉強の特徴は、基本的には知識を身に付けることが優先的な課題になっていることと、「正解」が明確に定められていることである。典型的なのが、世界史や日本史の科目で、ひたすら歴史的な事件や出来事を覚えた経験をした人は多い

だろう。そしてテストでは、穴埋めや記号などで回答し、○か×のどちらかが付けられ点数が計算された。

これに対し大学では、基本的な知識を身に付けることだけではなく、その知識を使って自分なりに考えをめぐらせ、そうやって考えたことを他者に伝えるところまでが求められる。そして大学の学びの集大成となる卒業論文では、自分でテーマを決定する。つまり、問題そのものも自分で設定するのである。このように、大学での学びである「研究」とは、自分で問いを設定し、その問いに自分なりの答えを出すものなのだ。だから、大学では、問題に対する答えに必ずしも「正解」があるわけではない。各自が正解と思うものを主張し、その主張の論理的な正確さや説得力の高さが評価の対象になるのである。

こうしてみると「研究」とは、授業を受けたり、本を読んで知識を頭に詰め込むことではないことが分かるだろう。「研究」とは、身に付けた知識を使って自分なりに考えたことを表現する営みで、新しい知識を生み出すことと言い換えることができる。その意味で大学の「研究」は、とてもクリエイティブな世界なのである。小学生の時、夏休みに自由研究に取り組んだ人は多いことであろう。自由研究という名前が示している通り、自分で好きな課題を設定し、それを成果としてまとめたと思う。大学の研究も同じで、自分でテーマを決めて成果をまとめるものである。

このことは他のクリエイティブな世界と比較すると良く分かる。たとえばアートの世界である。アートの場合は、自分の抱いた感情や気持ちを深く掘り下げていき、そこで得たインスピレーションを絵画や彫刻、音楽あるいは文学作品などを通じて他者に伝える。それと同じように「研究」も社会に対する疑問や違和感を出発点にして、文献を読んだり、調査したりして深く掘り下げ、そこで得た知見を「論文」という形式で他者に伝えるのである。

そして、「研究」にはクリエイティブな世界を根幹から支えるルールが存在している。それは「自分なりに生み出したオリジナルの考えを示す」というルールである。アートの世界で盗作は最大の罪であるのと同じように、「研究」の世界でも盗作（剽窃）は学問の根幹を裏切る最大のルール違反である。学生が他人の書いたものをコピー&ペーストしたレポートや論文を提出すると、その教員は単位を認めないどころかその学生を呼び出して厳しく説教までするのは、そういった事情からである。たとえどんなに上手に表現できなくても、自分の言葉で表現する姿勢を忘れてはならない。

ここまでの話をまとめると、大学で学ぶ学問とは、世界を見て考えるための性能のいい「道具」であり、大学で学問を学ぶということは、「知識」を得ることではなく「考える道具」を見つけることなのである。大学の学びを通じて、学問という考える道具を使って目の前の現実を理解し、新しい知識を生み出すことができるようになってほしいのだ。

では、この大学で学んだ学問は役に立つのだろうか。卒業論文を例にあげて考えてみよう。卒業論文の完成に至るプロセスを簡単に辿ると次のようになる。まず、研究するテーマや題材を決定し（問題の設定）、それに関する本や論文を読んで知識を獲得していく。そして現地で調査を行ったり、新聞記事などの資料を探して読んだりして得た情報であったり、時には友人や自分自身の実体験を振り返ることもあるかもしれない（情報の収集）。そうやって集めた情報をこれまで読んだ本や論文と比較したりして研究テーマについて深く掘り下げていく（分析と考察）。そして次に研究テーマを掘り下げた結果として自分なりの考えや知見を論文としてまとめて、提出する（表現と説明）。文系学部 of 平均的な卒業論文はだいたいこのようなプロセスを辿るであろう。

ところが、この一連のプロセスは卒業論文だけではなく、ビジネスでもみることができる。たとえば、あなたはアイスクリームのメーカーに勤めていて、あるフレーバーのアイスクリームの売り上げが伸びずに悩んでいるとしよう。すると上司はあなたにこの商品の売り上げを伸ばす対策を考えるように指示をした（問題の設定）。そこであなたは、この商品について消費者がどう思っているのか、

アンケートをとったりインタビューをしたりするかもしれない（情報の収集）。次に、その結果を元に何が売れない原因か探っていくと、どうやら原因はパッケージのデザインにあって、魅力あるパッケージにすることが必要だと分かった（分析と考察）。そこで会議では上司に対してパッケージの変更を改善策としてプレゼンテーションする（表現と説明）。

このように、卒業論文を書くこともアイスクリームの売り上げを伸ばすことも、(1) 問題を設定し、解明するのに必要な情報を収集する、(2) 集めた情報を元に分析や考察を加え、新たな情報を生み出す、(3) 得られた知見を文章で表現したり、人に説明する、というプロセスを経ていることが分かる。つまり、卒業論文を書くこともアイスクリームの売り上げを伸ばすことも骨格は全く同じ方法で取り組むものなのである。確かに卒業論文を書くために学んだ知識が実社会で役に立つことは少ない。だが、卒業論文を書くプロセスで身に付けて欲しいことは、知識ではなく「考える方法」なのだ。「考える方法」を身に付けることで、私たちはどんな時でも色々な問題について深く考えることができるようになる。これが大学で学問を学ぶ意義なのである。

以上の話で、大学で何を学ぶことの意義が少しは明確になってきたと思う。そこで、次に具体的にどのような姿勢で大学の授業に臨めば良いのか述べていきたい。大学の授業には様々な形式のものがあるが、大きく分けると講義・演習・実習の3つに分けることができる。

【問い】

Q-1 もし今から卒業論文を書くことになったら、どんなテーマにしますか？

Q-2 あなたの好きなアート作品を取り上げ、それが何を表現しているのか考えてみよう。

2 大学における主な学びの形式

2.1 講義とは何か

講義というと、大きな教室でたくさんの学生を相手に教員が一人で話をする形式の授業をイメージすることだろう。そのイメージ自体は間違っていないが、ではなぜこのような形式で授業をするのだろうか。それは、その学問分野を学ぶのであれば誰もが基本的に理解しておくべき事柄というのは存在しており、それを効率良く多くの学生に教えることができる形式だからである。

先ほど、大学での学びは「研究」であると述べたが、大学教員は学生にレクチャーをする教師という役割のほかに、研究者という肩書きも持っている。そのため、大学教員は、授業をしていない時間になると、卒論に取り組む4年生と同じように自分の研究テーマに取り組んでいるのである。その意味で大学という組織では、教員も学生も同じ「研究」という目標を持っているのである。とはいえ、大学に入学したばかりの学生がいきなり研究できるものではない。そこで、たまたま研究することに関しては先輩である大学教員が、初学者の人を集めて、自分が研究してきた内容とその分野の基本的な事柄をレクチャーするのである。これが講義の役割なのである。そして講義する内容は大学教員が研究してきた内容であるから、それは大学教員が身に付けた知識を使って自分なりに考えたことを表現していることになる。したがって、教員の見解が必ずしも唯一の「正解」となるわけではない。様々な見解もありうるし、同じ意見でもそこに至る過程が違うこともある。これで大学の講義が正解をはっきりと言わない理由が分かったと思う。

「あの先生の講義は面白くない」という学生の声は良く耳にする。その原因が教員の力量であることは少なくない。しかし忘れて欲しくないのは、教員の力量だけが講義の善し悪しを左右するわけではないということである。筆者が学生の時に受けていたある講義は非常に評判が悪かった。世界の

国々の給料に対する意識の違いを明らかにする内容であったが、先生の声が小さい、説明が分かりにくい、私語を注意しない、教科書をなぞっているだけ…、そうした不満の声でいっぱいだった。そしてそれらの不満は間違いではなく、本当のことだった。そのような講義をたまたま教室の端っこで1人で受けていた筆者は、先生の話聞きながらふと思った。たしかに話し方は面白くないけど、話している内容は興味深いぞと。

その時に気が付いたのは、教員はエンターテイナーではないという当たり前のことである。講義はテレビ番組や人気の YouTuber の動画とはまったく異なる性質の場である。そしてエンタメの世界では、出演者や制作スタッフが視聴者を少しでも楽しませようと必死に努力しており、その努力の集大成がコンテンツとなって提供されているのである。かたや大学教員はそうではない。エンタメのコンテンツ制作をする努力と同じくらい努力して研究をしてきた人たちである。だから、テレビ番組や YouTuber の動画と比べてつまらないのが当たり前なのである。

そして、受講する学生の勉強不足も要因になりうることに気が付いた。大学を卒業するときに、同級生が「今の知識で1回生から講義を受け直すことができるなら、もっと興味深く講義を聴くことができるのに」と話していた。このような感覚を持つ人は少なくないようで、この言葉にうなずく学生もいたし、同じことを話して卒業していく学生にも出会った。この言葉のポイントは、1回生では、それほど知識と経験がなかったから講義が十分に理解できず、だからつまらなく感じたということである。

とはいえ、急に4回生と同じ知識と経験を持つことはできない。では、どうしたら良いだろうか。講義に興味深いものにするコツは色々あると思うが、筆者の考えるものは、自分の問い＝「研究テーマ」を持つことではないかと思う。自分が探求したい「研究テーマ」を持つことで、講義の中で自分の研究に参考になる部分を見つけたり、関連した知識を得ることができれば、講義が興味深いものになるのではないだろうか。

講義とは、その学問分野について基本的な事柄をレクチャーする場であると述べたが、言い方を変えれば、学生が自分で「研究」ができるように基礎的な知識と考え方を身に付ける場でもある。それが講義の役割なのである。そう考えると、講義を聴く時には、さまざまな問題や出来事に対して、先人たちが、どういうところに着目していったのか（視点）、どのように解釈したり理解していったのか（分析）、そして何を発見し何を知識として得たのか（知見）、といったように研究を「追体験」していくものであると言えるだろう。そのなかで（あるいは講義が終わってから）、研究テーマを念頭に置きながら、自分の問題関心や興味がある題材のどこに着目したら良いのか、どのように分析できるのか、何が見えてくるのかについて考えてみると、講義の理解がより深まることだろう。

それでも、入学したての学生の場合には、自分が何を探求したいのか良く分からないという人も多いだろう。その場合には、今すぐ研究テーマを決めることができなくても構わない。大切なのは自分が探求したいことが何か常に意識して考えてみることで、今から卒業論文を書くとしたら何を書こうかな、と気楽な気持ちで考えてみたり、さしあたり今年度の研究テーマはこれというくらいの気持ちで考えてみたら良いだろう。

2.2 演習とは何か

次に説明するのは「演習」という形式である。演習は授業科目名であるがゼミとも呼ばれ、だいたい同じような意味で使われている。ゼミという言葉の使い方としては、その演習を受講している学生と教員をまとめて「〇〇（教員の名前）ゼミ」ということもある。

呼び方はともあれ大事なものは、自分が所属する演習（ゼミ）は、おそらく大学で学ぶうえで日々の

勉強の中心となるところだということである。高校までの教育システムで言えば、自分のクラスに近いものである。学生全員がどこかのゼミに配属され、15人前後で構成されることから、その学年全体の大切な連絡事項はゼミを通じて告知されたり、学生生活に関する個別の相談もゼミの先生が窓口になることが多い。3回生から配属されるゼミは卒業までメンバーが変わらず、卒業論文の指導がおこなれる。そして、ゼミの先生が卒業論文を審査し、卒業式の後の卒業パーティーもゼミごとに着席する。それくらいゼミは学生生活の中心になるのだ。

では、この演習はどういった学びの場なのか。演習によって、取り扱うテキストも違えば、なかには大学のキャンパスを出て現地見学やインタビュー調査する演習もあったりする。演習を担当する教員の専門分野と学生の興味関心によって内容は様々であるが、ほとんどの演習で取り組まれているのが、プレゼンテーションの課題である。これは、プレゼンする日程を設定し、その日までに授業のない時間を使ってプレゼンの準備をして、当日にプレゼンを行い、その内容について先生からコメントやアドバイスをもらったり、ゼミ生も交えてディスカッションするといったものである。

ここで大切なのは、プレゼンする当日までの準備こそが学びの成長過程であるということである。プレゼンのために色々と調べたり、試行錯誤して準備を進めていくわけだが、プレゼン当日の演習はその試行錯誤の成果を示し、次の課題に向けてアドバイスをもらう機会なのである。したがって、プレゼンの準備や取り組みが、手を抜いていたり、いい加減なものであれば成長しないし、アドバイスもそれまでの成長段階に応じた内容にとどまってしまう。つまり、初心者レベルのプレゼンをしたら初心者レベルのアドバイスしかもらえないということである。お寺の鐘と同じように、力を込めて叩かないと鐘の音は強く響かないのだ。

そしてもうひとつ大切なことがある。それは演習とは教員が学生を指導するだけではなく、学生同士がお互いにアドバイスする場でもあるということである。その日、自分がプレゼンする日ではないからといって、ただ座って先生の話やプレゼンを聴いていれば良いということではない。自分も先生のように積極的にアドバイスする役割があるのだ。自分の課題をこなすことも大事だが、他の人の課題を支えることも大事なのである。学生同士がお互いに助け合うことで、飛躍的に学びの質が高まるからこそ、教員は学生と一緒に学ぶ環境を用意しているのである。

2.3 文献購読とは何か

以上を踏まえて、もう少し具体的なイメージがもてるように、多くの演習で課題となることが多い「文献購読」について解説をしておきたい。

文献購読の「購」は集まるという意味がある。すなわち文献購読とは、みんなで同じ本を読んでから授業で集まり、難しく理解できなかった点、ピンと来なかった点についてお互いに教えあったり、すぐく納得できた点、読んでいて感心した点、書いてあることが違うと思ったり、間違っている気がした点などについてディスカッションしたりするものである。したがって、最低でも授業の準備として課題のテキストをしっかりと読むことが必要である。そして、課題のテキストを読んでもらうだけでなく、できる限り上記の内容についてディスカッションできるようにメモやノートを作成して文献購読に参加することが望ましい。他にも準備できることとして、いろいろなメディアを使って関連する情報を集めるのもよい。課題文献だけ読んでいても理解は浅くなりがちなので、テキストに関連した本や論文を読んでみたり、新聞や雑誌の記事を探すのもよい。映画や小説、漫画なども参考になる場合がある。課題のテキスト以外に読んではいけないというルールはない。積極的に情報を集めてみよう。

ディスカッションでは、積極的に発言していこう。自分が分からなかったところは他の人も分から

なかった場合も多い。課題のテキストだからといって全て理解できるわけではないし、教員はそのつもりで課題のテキストを選んでいる。だから、積極的に質問をして構わない。質問する際には、教員に尋ねるのではなく、みんなに見解を求めるのが良い。読んだ時に分かった気になっていても、いざ説明しようとするとなんか分かっていないことに気が付くからである。大学では、分からない、知らないことは恥ずかしいことではない。それを放置することの方が自分の成長につながらず好ましくないことなのだ。また、ディスカッションでは意見が異なることが大事である。テキストの内容に納得できなかったり、違和感を感じたら、そのことを示すべきである。大学のテキストは全て正しいことが書いているわけではない。テキストの中に考え方を変えるべき見解があったら、なぜそれを変えるべきか主張すれば良いのである。

このように文献講読のやり方を説明すると、なんだか難しいことをしているように思うかもしれないが、そんなことはない。私たちが映画を観たり、小説や漫画を読んだりしたとき、それらの作品について「おしゃべり」や「雑談」することがあるだろう。あのシーンの主人公の言動はカッコ良かったとか、あの場面でのあの判断は理解できなかったとか、もう少しこういったストーリーにした方が面白くなったのではないかといった内容のおしゃべりである。私たちが日常生活でエンタメ作品の「おしゃべり」や「雑談」をするのと同じように、文献講読では、本や論文の内容について「おしゃべり」や「雑談」をするのである。この著者の分析はとても理にかなっていて鋭い指摘であるとか、著者はこの社会現象の若者心理を誤解しているのではないか、といったようにである。演習でのディスカッションとは、いわば「学問のおしゃべり」である。

もうひとつ補足すると、この文献講読は教員がいなくても文献講読をすることが可能である（そのような集まりを読書会と言う）。授業の前に学生だけでディスカッションをして、難解なところを教え合ってみても良い。1人で読んだときに理解できなかった部分があっても、文献講読で補うことができるだろう。あるいは、似たような興味関心を持つ人と読みたい本や論文が共通している場合には読書会をするのも良い方法だ。読みたい本や論文があるけど、難しくして1人ではくじけてしまいそうとき、読書会を開催してみたい。

以上を踏まえて、演習に参加する時の「心得」を挙げておきたい。自分が発表者になった時、あるいはオーディエンスとして演習に参加する時、どういった心構えで参加すると良いのか。ありがたい失敗やちょっとしたコツをまとめてみた。

発表者の心得

- 発表の担当することは、その日の主役を務めることと同じ。絶対に遅刻欠席はしてはいけない。
- 前日に徹夜で頑張って準備した！→少し時間があるから仮眠しよう…→寝坊！の罠に注意。
- ペースを守ってコツコツと継続的に研究する計画性とギリギリまでやり抜く粘り強さの両方が必要。
- しかしながら、締め切り（提出する日や発表の日）は時間に余裕をもって取り組むこと。もし中間報告の機会があれば、そこで粘りまくる。中間報告だからと手を抜く人が多いが実は生産的ではない。
- 自分の考えを理解してもらうために根拠を示しながらオーディエンスを説得するのが目標。
- プレゼンと論文執筆の積み重ねで、物事を論理的に考え、他者を説得するチカラを身に付ける
- 準備をサボった人間にはその程度のアドバイスしか得られない。強く叩かなければ大きく響かない。

オーディエンスの心得

- 遅刻欠席はその日の主役に失礼。
- 他の人が発表する回は「休み」ではない。発表者および他の受講者と議論をする役割がある。
- 居眠りは発表者のモチベーションを傷つけるもの。「眠かったら寝てて良いよ～」は優しいウソ。
- ゼミで一言も発言しないのは欠席したのと同じという気持ちでゼミに臨んでほしい。
- 仲間の研究発表に対しては、自分がそのテーマで研究しているつもりになってアドバイスをしよう
- 自分ことは柵に上げて構わない。自分の研究じゃないからこそ見えてくることがある。
- 参加者は、あえて物分りの悪い人間になることが必要。そう簡単に発表者に説得されてはいけない。異論をだす・反論をするくらいのもつりて聞く姿勢を持つことも必要。
- とはいえ、時には発表者が言いたい事をすくい取る気持ちで話を聞く必要もある。あなたが言いたい事はこういうこと？と発表者に尋ねてみよう。そして、「それなら、こうすればもっと説得力がある」とアドバイスできると理想的。

ディスカッションの心得

- 先生に話すのではなく、全員に向かって話をする。同じ話題を全員で共有しながら議論すること。
- 誰かが話しているときに隣同士で勝手にこそこそ会話をするのは無礼である。
- 尋ねたいことが出てきたら発言のキリが良いときや話し終わったときに尋ねるべし。
- 話を聞き逃したら隣の人に尋ねるのではなく、話し手にもう一度話してもらおうように頼むこと。
- 議論している話題がつまらないのであれば、自分が興味を持てる話題を提供すること。
- 議論が退屈に感じたら、それは教員や他の受講者の責任ではなく自分の責任である。自分にとって興味深い話題を議論するように周りをリードできなかった自分の力量不足を反省すべき。
- 議論している話題から多少は脱線しても大丈夫。議論が大きくズレたら先生が軌道修正してくれるので、細かいことは気にせず発言してみよう。
- 上から目線で世の中を論評してみせることが大事。自分ことは柵に上げて構わない。
- 立派なことを言う必要はない。素直に自分の言葉で分からなかったところや納得できなかった箇所、感心した点を話して良い。
- なにはともあれ「おしゃべり」「雑談」に参加する、という姿勢を持つこと。おしゃべりが得意な人は、司会者のように苦手な人に話を振ってあげることも考えよう。
- 受講者が黙っていれば、教員が好きなことを話しまくるだけで受講者にとっては退屈な時間になる。

2.4 実習とは何か

3つ目の授業の形式として、実習について解説をしておきたい。実習系の授業はそれほど多いわけではないが、おそらく卒業するまでに必ず何がしかの実習系の授業を履修することがあるはずであ

る。実習科目の特徴は、その授業時間のなかで課題や作業内容が提示され、それに各自で取り組んだりあるいはグループなどで一緒に取り組むというところにある。そして、課題に取り組んでいる最中に必要に応じてアドバイスをもらう形式であるといえるだろう。高校までの「調理実習」と同じ形式であるといえばイメージしやすい。調理実習では課題が料理をすることであるが、パソコンの授業であればアプリケーションの扱い方であったり、社会調査法の実習科目であれば、実際に学生がインタビューをしたり、アンケートを取ったりするといった内容になる。

このような実習科目においては、毎回の授業ごとに課題や作業内容が設定されており、それを毎回クリアしていくことで段々とステップ・アップしていけるように授業が計画されている。したがって、遅刻はもちろんだか、欠席するとステップ・アップできずに、授業についていけなくなってしまう。たいていの実習科目で出席を重視するのはそのためである。また、授業で設定されている課題や作業内容は最低限の合格ラインであることが多い。最低限の合格ラインを目指しているだけだと、評価は上がり身につくことも少ないばかりか、落第のリスクも高まる。自分なりに自習したり練習してプラスαを目指そう。

なお、演習の中には実習のように授業中に課題に取り組むスタイルのものも存在している。それでも学びの基本はほとんど変わることはない。それぞれ学問分野や先生の教育方法によって、演習のスタイルは様々なものが存在している。大切なのは、授業の主役は学生であることを自覚し、受け身で授業を受けるのではなく、自ら学び成長しようという意欲を持って授業に臨むことである。

【問い】

- Q-3 友達と小説や映画、漫画、アニメなどの作品について感想を話し合ってみよう。
- Q-4 読んだ本のブックレビューをお互いに紹介する「ビブリオバトル」に挑戦するのもよいでしよう。
- Q-5 講義の後、感想や意見、分からなかった点を話し合ってみよう。講義の理解が深まります。

3 なぜ？と問いかけてみよう：研究テーマを見つけるコツ

これまで講義・演習・実習の授業の受け方について述べてきた。これらの授業形式にはそれぞれの特徴があるが、いずれの授業形式であっても、大学での学びで中心となるのは、それぞれの授業の前後に自分で学び、課題に取り組む時間にある。授業を受けている時間だけが大学での学びの時間なのではない。そして、授業以外の時間に自分で意欲的に学ぶ意識を高めたり、授業を少しでも自分にとって有意義なものにするためには、自分が探求していきたい研究テーマを持つことが大切である。研究テーマを見つけることが、大学での学びを有意義にする第一歩なのである。

では、どのようにしたら研究テーマを見つけることができるだろうか。そのためのポイントは様々なことに疑問を抱く姿勢を忘れないということである。いわゆる文系の学問分野では、多くの研究が「なぜ」という疑問を抱くところから出発している。現代社会の生きる私たちが見聞きする様々な出来事や現象を当たり前のこととして受け止めるのではなく、「なぜそうなの？」「どうしてなの？」といった立ち止まって考えるクセを身に付けて欲しい。たとえば、結婚するとほとんどの女性が男性の姓に変更する。女性は男性の姓にするのが当たり前と思うのではなく、なぜそうなのか疑問を持って欲しいのである。このような疑問が研究テーマに結びついてくるのだ。

この時に気をつけて欲しいのは、「～べきだ」と簡単に結論を出そうとしないこと。たとえば、再生可能エネルギーと原子力エネルギーのバランスという社会的な課題に対して、「原発をやめて再生

可能エネルギーを普及させるべきだ」や「もっと安全な原発を開発すべきだ」などと結論を出すことは避けた方がよい。というのは、このような「～すべきだ」といったことは、現状を良く知らなくても、いい加減な知識しか持っていないなくても論じることができる内容だからである。原発の安全技術の開発コストを知らなくても、もっと安全な原発を開発すべきだと主張することはできてしまう。それに対して、「なぜ再生可能エネルギーが普及しないのか」「どうして安全な原発を開発できないのか」といったように「なぜ?」「どうして?」と問うてみると、その問いの答えるためには現状を良く調べ、キチンとした知識を得ないと答えられないことが分かる。つまり、「なぜ?」「どうして?」と問題設定をすることで、物事をより深く認識しようとする構えが生まれるのである。

似たような症状でも、原因が風邪であるのに花粉症の薬を飲んでも風邪は治らない。このように、医者が病気の人を診察した時に、キチンとした検査結果に基づいて正確な診断を下すことができなければ、誤った治療方法を用いてしまう。それと同じように、現代社会の正確な現状認識ができなければ、誤った解決策や政策を用いてしまうのだ。

そして「なぜ?」「どうして?」という問題設定であれば、何でも研究テーマになるわけではない。大学の学びとして研究するからには、大学という公共的な社会空間に相応しいテーマでなければならない。つまり、その研究テーマが、私たちの社会にとって意義のあるテーマであることが必要なのだ。言い換えると、研究テーマとしては、少しでも多くの人に関心を持つべきテーマであることが望ましいのである。その意味で、社会にとって深刻な問題であるほど、研究テーマとして取り組みやすいことが多い。深刻な問題ほど既に多くの人々が研究しているため、たくさんの本や論文を参考にしたリ、様々なメディアで資料を集めることができる。また誰もが問題だと思うテーマであれば、社会的な意義について説明するのがそれほど難しくはならない。それに対して、一見すると身近で親しみやすい題材ほど、それを客観的な視点から捉え直したり、疑問を投げ掛けることが難しい。しかも、その研究テーマの意義を説明するのが難しくなってくるのだ。たとえば、子ども食堂を通じて子どもの社会的貧困について研究することとなぜディスニーランドは人気があるのかというテーマで比較すると理解できるだろう。

おわりに：有意義な大学生活に向けて

ここまで長々と述べてきたが、そのほとんどが大学でしっかりと学びなさいというメッセージであった。では、筆者はすべての学生にガリ勉になって欲しいのかというとそうではない。大学のキャンパス以外にも学びの場はたくさんある。アルバイトやサークル活動、インターン・シップなどで学ぶこともたくさんあるだろう。それらも貴重な学びの場である。むしろ、キャンパスに閉じこもらず、積極的に外に飛び出して、いろいろな世代の人たちと出会い、さまざまな立場の人たちから学ぶ姿勢を持って欲しいと思っている。

「よく学び、よく遊べ」と言われているように、「遊び」のない人生ほどつまらない人生はない。しかし学ぶことをしなければ、遊びの面白さも半減してしまうことも多い。たとえば、イギリスの映画を観る時に、イギリス社会の歴史や文化について知らないことが多いと映画の内容が十分に理解できず映画を楽しむことができない。炭に火を付ける方法を知らなければ、バーベキューで肉を焼くことができない。そして「遊び」のなかにも学べるものを見つけることができるので、いつも学ぶ姿勢を忘れないで欲しい。

おそらく一生に一度の大学生活である。そのなかで、できるかぎりたくさんの本を読んだり、さまざまな体験をしたりして見聞を広めてほしい。そのなかで色々な人と出会い、そうした体験を互いに語ることによって豊かなボキャブラリーを獲得し、自分を表現する能力が磨かれる。大学生にとって

おしゃべりも大切なことなのだ。どんなに立派なことを考えていても、それを他人に伝えられなければ何も考えていないのと同じである。たとえば、友達と旅行に行く相談をしている時、訪れたい場所があるのに黙っていたら、行先がそこになることはないし、周りの人はどこに行っても良いと思っていると判断してしまう。だから積極的に自分の考えを表現できるチカラを身に付けて欲しい。高校まではインプット中心の勉強だったが、大学からはアウトプットも身に付けなければならない。

最近の大学生の就職活動をめぐる周囲の声に焦る気持ちがあると思うが、就職することだけが大事なのではない。大学を卒業してからも長期的に多方面で活用できる〈基礎的な地力〉を身に付けることも、「大学で学ぶべきこと」のひとつである。大学での学びとして身に付けた研究する能力は、〈基礎的な地力〉そのものと言っても過言ではない。また、社会人として必要な「コミュ力」とは、人の話に調子よく合わせることができる能力ではない。言葉や文章を介して、相手の考えをしっかりと理解したうえで、自分の考えを正確に伝える能力のことである。そしてそのようなチカラは、講義や演習、実習、卒業論文などにじっくりと取り組まなければ身に付かないチカラである。就職活動の対策も大事だが、大学の学びを通じて就職してから活用できるチカラを身に付けて欲しい。

大学での学びは「山登り」に似ている。自分で挑戦する山（研究テーマ）を選び、ルートや天候を調べて、山の特徴に合わせた訓練を重ねていく（講義・演習・実習など）。そうやって準備を整えたうえで、最後は自分の力で山頂を目指すのだ（卒業論文の執筆）。大学教員は山登りのコツや登山道具を提供することはできるが、実際に山に登るのは学生自身である。山頂に向かう途中、順調に進むこともあれば、険しい斜面や悪天候で苦しむこともあるだろう。けれど、同じ目標を持った仲間とお互いにアドバイスをしながら、たくさんの挑戦と苦勞、成功と失敗を何度も積み重ねた先に見ることができた山頂の景色は、きっと忘れられない経験となるだろう。

【問い】

Q-6 「なぜそうなの？」「どうしてなの？」と妙に気になった実体験や違和感を感じたエピソードはありますか？

Q-7 これは大事なことだな、深刻な問題だな、と思うニュースがあったら深掘りしてみよう。

参考文献

京都女子大学 FD 推進委員会・編『アカデミック・スキル 2024』（入学時に配布されたもの）

船橋晴俊，2012，『社会学をいかに学ぶか』弘文堂

田中共子・編，2009，『よくわかる学びの技法』，第2版，ミネルヴァ書房

白井利明・高橋一郎・編，2008，『よくわかる卒論の書き方』ミネルヴァ書房

野村一夫，1999，『社会学の作法・初級編：社会的リテラシー構築のためのレッスン』文化書房博文社

高根正昭，1979，『創造の方法学』講談社

荻谷剛彦，2002，『知的複眼思考法：誰でも持っている創造力のスイッチ』講談社